



9784815810597



1923033072006

ISBN978-4-8158-1059-7

C3033 ¥7200E

定価 (本体 7,200円+税)

名古屋大学出版会

# 日本 綿業史

徳川期から  
日中開戦まで

# 日本 綿業史

徳川期から  
日中開戦まで

阿部武司  
Takekichi Abe  
著

序章 日本綿業の生成と発展

## I 日本綿業の興隆

- 1 近代日本綿紡績業確立の背景
- 2 近代綿紡績業の勃興と定着
- 3 綿紡績業の技術と労働

補論1 戦前期日本綿業における女性労働

- 4 産地綿織物業の展開

- 5 産地綿織物業における問屋制の盛衰

- 6 賃機から力織機工場へ

補論2 明治後期の賃機工賃

## II 日本綿業の黄金時代

- 7 戦間期における日本綿業の事業戦略

- 8 戦間期における産地綿織物業の躍進

- 9 今治綿織物業の展開

補論3 備後地方で繊維産業がなぜ発展したのか

- 10 日本綿業と中国市場

- 11 在華日本紡績同業会の活動

- 12 綿紡績企業における経営者群像

終章 日本の経済発展と綿業

阿部武司  
Takekichi Abe  
著

名古屋大学  
出版会

名古屋大学出版会 定価 (本体 7,200円+税)

## なぜイギリス綿業を こえられたのか？

明治の産業革命をリードし瞬間に世界市場を制覇した日本綿業の競争力の源泉とは。近代的大紡績企業と、近世から続く農村織物産地や流通を担う問屋・商社などの連携による成長過程を初めて解明、巨大産業の興隆を圧倒的な密度とスケールで描く決定版。

日本綿業史  
目次

序章

日本綿業の生成と発展

——紡績会社・織物産地・問屋——

- 一 日本経済史・経営史上における綿業の意義 1
- 二 本書の構成 15

第I部 日本綿業の興隆

第1章

近代日本綿紡績業確立の背景

——明治期を中心にみた農村織物業の特質——

はじめに 22

- 一 明治期農村織物業における原料系の変遷——手紡糸・輸入機械糸・国産機械糸 23
  - 二 農村における繊維品の自家生産——兵庫県農村の事例 26
  - 三 産地綿織物業と景気変動 33
  - 四 産地綿織物業における三度のイノベーション 39
- おわりに 44

第2章

近代綿紡績業の勃興と定着

はじめに 46

- 一 明治二〇年代における近代的綿紡績業の発展 47
  - 二 日清戦後の不況 59
  - 三 日露戦後の新たな展開 74
  - 四 財閥と繊維産業 78
- おわりに 88

第3章

綿紡績業の技術と労働

はじめに 90

- 一 イギリスにおける展開 91
  - 二 アメリカにおける展開 96
  - 三 日本における展開——大阪紡績会社の事例を中心に 100
- おわりに 111

補論1

戦前期日本綿業における女性労働

はじめに 113

- 一 「女工哀史」 114
- 二 「原生的労働関係」の展開 116

## 第II部 日本綿業の黄金時代

## 第7章 戦間期における日本綿業の事業戦略

——紡績業を中心として——

- はじめに 256
- 一 伝統的戦略の展開——水平的結合と垂直的統合 259
- 二 新戦略の展開 274
- おわりに 305

256

## 第8章 戦間期における産地綿織物業の躍進

- はじめに 308
- 一 戦間期日本の産地綿織物業 309
- 二 綿織物業の地域類型 312
- 三 産地綿織物業の発展戦略 317
- 四 日本綿業のなかの産地織物業 326
- おわりに 328

308

## 第9章 今治綿織物業の展開

- はじめに 331
- 一 今治綿織物業の発展 333
- 二 今治綿織物業における同業者団体と工業試験場 338
- おわりに 350

331

## 補論3 備後地方で繊維産業がなぜ発展したのか

## 第10章 日本綿業と中国市場

——一九一四～一九三〇年——

- はじめに 358
- 一 第一次世界大戦前後における日本綿業と中国市場 359
- 二 第一次世界大戦を画期とする中国紡績業の発展 367
- 三 一九二〇年代日本綿業の中国進出 374
- 四 一九二〇年代後半以降における中国綿布市場の変容 384
- おわりに——一九三〇年代への展望 387

358

## 第11章 在華日本紡績同業会の活動

- はじめに 391
- 一 在華日本紡績同業会の設立 391

391

- 三 綿紡績業の労働条件の急速な改善 118
- 四 開明的経営者と政府の役割 121
- 五 第一次世界大戦以降の労働運動とILO 124
- 六 戦間期の紡績業における女性労働者 126
- おわりに 128

## 第4章 産地綿織物業の展開

——徳川期から明治期まで——

- はじめに 130
- 一 徳川時代における産地綿織物業 132
- 二 明治前期における産地綿織物業 146
- 三 明治中・後期における産地綿織物業 163
- おわりに 176

130

## 第5章 産地綿織物業における問屋制の盛衰

- はじめに 181
- 一 一八八〇年代における問屋制の確立 185
- 二 問屋制の変質と衰退 204
- おわりに 216

181

## 第6章

### 賃機から力織機工場へ

——明治中・後期における泉南綿織物業の場合——

- はじめに 223
- 一 分析視角 224
- 二 泉南における第一次力織機化 226
- 三 織元の対応——力織機工場か賃機か？ 235
- おわりに 237

223

## 補論2

### 明治後期の賃機工賃

——大阪府泉南地方の帯谷商店資料——

- はじめに 240
- 一 原資料について 241
- 二 集計方法 244
- 三 結果とその解釈 245

240

小 括 近代日本綿業の形成——近代産業と在来産業の併進 250

- 二 設立の背景 395
- 三 在華日本紡績同業会の活動 397
- おわりに 412

第12章 綿紡績企業における経営者群像……………

- はじめに 414
- 一 和田豊治と富士瓦斯紡績会社 416
- 二 資産家大原孫三郎の企業者活動と社会事業 438
- 三 大原孫三郎と武藤山治——経営理念と経営管理 456
- おわりに 463

- 小 括 日本綿業の世界制覇——大企業と中小企業との連携 465

終章 日本の経済発展と綿業……………

——総括と展望——

- 一 総 括 471
- 二 展 望 485

- 資料紹介 『日本綿糸紡績業沿革紀事』 495
- 付録 1 斉藤恒三宛伊藤伝七書翰 499
- 付録 2 泉大津織物業の歩み——大野歳雄氏に聞く 517

- 注 563
- あとがき 615
- 初出一覧 620
- 参考文献 卷末 19
- 図表一覧 卷末 15
- 索引 卷末 1

本書は、筆者が一九八三年以来、四〇年近くの間、折にふれて発表してきた、戦前期日本の綿業に関する論文など二十数編を取りまとめたものである。綿業史研究の意義については序章や終章ですでに述べたので、反復は避けるが、本書の特長をあげていえば、紡績と織物の二部門にまたがる考察を行い、企業間の競争とともに協調・連携が、明治期以降の日本綿業の急速な発展をもたらし、とりわけ一九三〇年代における世界制覇を実現したと論じたことであらう。

### あとがき

この視点は、第8章でも示唆した通り、東京大学経済学部の学生であった私が、同大学の大学院に入学を志願するさい、提出しなければならなかった論文のテーマを模索しているときに出会った山崎広明先生のご論文「日本綿業構造論序説」を一読して深い感銘を受けて以来、培ってきたものである。同じく山崎先生のお仕事に啓発されて、戦間期を対象とする『日本における産地綿織物業の展開』を一九八九年に上梓したが、八二年に東大社会科学研究所助手に採用されたところから「数量経済史（QEH）研究会」や一橋大学経済研究所主催の「経済発展研究会」などのメンバーに加えていただき、明治期の在来綿織物業の研究も進めるようになった。本書の第4章と第6章の元になった諸論文はそのころの成果である。

紡績業に関しても同じころから関心を持ち始めていたが、山崎先生の東大ご退官を記念して一九九五年に刊行された一書に寄稿した論文（本書第7章）の執筆を契機として本格的に取り組むようになった。その背景には、二つの研究会があった。筑波大学社会科学系から大阪大学経済学部に移籍した翌年の一九八九年に、上司の宮本又郎先生が、経営史学会関西西部会の夏季シンポジウムで、当時次々と刊行されていた紡績会社の百年史の執筆・編集にあたられた

担当者に、自由にお話いただき大学の教員が各報告にコメントするという企画を立案・実行され、私もそのお手伝いをするようになった。この催しを機に「紡績企業史研究会」を大阪市内の綿業会館で開催することになり、私が事務局を担当して、繊維業界を中心とした企業の方々と、斯業に関心をもつ大学などの研究者との交流が始まった。この研究会は、神戸大学の平野恭平氏のお世話でいまだに続いている。次に、一九九〇年ごろに当時、大阪市立大学経済学部教授であった中岡哲郎先生と、ランカシャー地域の経営史家デイヴィッド・ジュレミー先生のお二人を中心として、いずれも綿業が盛んだった大阪とマンチェスターの両都市の二〇世紀における比較史を考える「大阪・マンチェスター研究会」が発足し、そこに私も加えていただいた。この研究会は二〇〇〇年に Douglas A. Farnie, David J. Jeremy, John F. Wilson, Tetsuro Nakaoka and Takeshi Abe eds., *Region and Strategy in Britain and Japan: Business in Lancashire and Kansai 1890-1990* の刊行をもって終了した。以上二つの研究会を通じて私は紡績業への関心を深め、企業の方々、そしてジュレミー先生や後述のファーニー先生をはじめとする外国人研究者との交流を深めることができた。

ただ、人生は楽しいことばかりが続くものではない。二〇世紀末には海外渡航も容易になり、日英両国のグループでワークショップやコンファレンスを毎年のように開催し、相互の議論を重ねてはきたものの、成果の取りまとめとなるとファックスや国際電話に頼らざるをえず、しかもすべて英語での編集の仕事は、明らかに私の身を越えていた。おそらくこの時の過労も引き金となって、上記の成果が刊行された二〇〇〇年春、四八歳を迎えようとしていた時に突然膠原病を発症して、それ以来難病もちの身となり、以前の活力を失った。さらに、二〇世紀末からの「大学改革」に二〇〇三年春の大阪大学評議員就任以後付き合わざるをえなくなり、約一〇年、大学院研究科長など、大学執行部の実働部隊の一員として学内行政に忙殺された。この間の経験は別著『アーカイブズと私』で述べたので繰り返さないが、そうしたなかでも山崎先生とご一緒に進めた広島県備後地方の産地問屋・佐々木家に関する経営史的研究（本書補論3を参照）、ミネルヴァ書房から出版された『講座・日本経営史』（本書第3章）など経営史学会主催の研究

いくつかの事業、久保亨・萩原充・富澤芳亜・桑原哲也等の諸氏との在華紡をはじめとする中国における日系企業に関する共同研究（第11章を参照）、そして『東洋紡一三〇年史』（二〇一五年刊行）への参画などのおかげで、細々ながら綿業史研究を続けることができた。

二六年間お世話になった大阪大学より国士舘大学に移籍した二〇一四年春からも持病の状態は一進一退ではあったが、「大学改革」の荒波からはようやく離れることができ、大原孫三郎の伝記（第12章第二・三節を参照）など新しい仕事にも取り組めるようになった。

本書は、途方もない長い歳月の間、以上のような紆余曲折を辿りながら考え続けた研究を整理してみたものである。とりわけ昔書いた論文は大部分陳腐化しており、我ながら読むに堪えないと思う箇所が多かった。また、英語で書いた論文は、外国人向けの説明であるため、それを和訳しても日本の読者には決して理解しやすすくないことにも気づいた。今回、共著論文については修正を極力避けられども、筆者個人が書いた論文等に関しては思い切った改訂を行った。あちこちがほころびた中古住宅を、客人を迎えて恥ずかしくない状態に大改造することは高齢者となった身には骨の折れる作業ではあったが、その過程で過去数十年間に世に出た内外の優れた研究成果を集中的に読破し摂取できたことは、まことにありがたかった。本書が、それらの業績を著してくれた諸氏のほか、日本綿業史研究を志す若い方々にも読んでもらえれば幸いである。

本書の執筆にあたり、いくつかの章の共著者である井上真里子、斎藤修、村上義幸、松村敏の諸氏は、元の論文等の本書への再録を快諾して下さった。大田康博、下向井紀彦、杉原薫、谷本雅之、玉井金五、千本暁子、富澤芳亜、西沢保の諸氏には原稿の一部をお読みいただき貴重な助言をいくつも賜った。また、第7章中の東アフリカに関する箇所は、二〇二一年三月に、杉原薫氏が主宰するインド洋交易圏経済史に関するオンラインでの研究会で拝聴した、政策研究院大学院で博士論文の執筆を進めておられる佐藤盟信氏の優れた報告『The Structure and Expansion of East Africa's Trading Network, c.1890-1936 (Zanzibar, Kenya and Uganda, and Tanganyika)』から大いに刺激を受け、すぐに集めら



れる資料をそろえて、あまり時間を置かずに書き上げたものである。草稿をお読みいただきたいという筆者の突然の不躑なお願いにもかかわらず、佐藤氏は多数の貴重なご教示はもちろんのこと、入手しにくい英文資料を惜しみなく提供して下さった。本書に含まれているかもしれない誤りがすべて筆者の責任であることはいうまでもないが、以上の方々のご厚情には心より御礼申し上げたい。

本書を書き終えた今、改めて感謝を申し上げたい先学は多い。恩師山崎広明先生のお名前はすでに挙げさせていただいたが、中岡哲郎先生と杉原薫氏は、外国におよそ無関心であった私に、日本を研究する場合にも国際比較のない国際関係の解明に努めるべきこと、そして海外の一流の研究者と私生活まで含めて交流を深めることの二点の重要性を、身をもって教えて下さった。中岡先生のプロジェクトでお知り合いになった、イギリス綿業史の大家、故ダグラス・ファニー先生は、私が一九九二年夏に一カ月マンチェスターに滞在して以来十数年間、イギリスまたは日本で毎年一、二回数日間程度ではあったが、一対一でお話しするようになった。当時教授職をお務めになっていたマンチェスター・メトロポリタン大学の二室で、朝九時ごろから昼食をはさみ、気がつくとき暮れを迎えているという長時間、日英の綿業に関して私の拙い英語に耳を傾けて下さった慈愛に満ちたお姿を今でも懐かしく思い出す。先生は、イギリスのみならず各国の綿業に関する膨大な知識を惜しみなくご教示下さった。私は、二〇〇八年に世を去られた先生の晩年の弟子を勝手に自称している。ファニー先生と同じく中岡哲郎先生を介して面識を得た産業技術史家の玉川寛治先生とも長いお付き合いであるが、とりわけ二〇一五年以来、紡績史に関心をもつ結城武延、平井直樹、ややのちにメンバーに加わった平野恭平という若い諸君とともに「紡績図面研究会」に参加いただき、毎回貴重なご教示を賜っている。八〇歳代後半というご高齢にもかかわらず、欧米から紡績技術史関連の書物を取り寄せて旺盛に楽しそうに研究を続けておられる先生の警咳に接していると、多少のハンディキャップを抱えている身でも、果たさなければならぬ仕事はまだまだあることを痛感する。

なお、しばしば悪化し、生死の境をさまよったこともあった膠原病に適切に対処して下さった大阪大学医学部附属病院、二〇一四年春、東京に移住したのち引き続きお世話になっている慶應義塾大学病院の医療従事者各位、そして難病患者の私を長年支えてくれた妻泰子に心より感謝の言葉を捧げたい。また、コロナ禍により図書館の利用が制限されるなか、本務校国士館大学ならびに非常勤講師を務めている早稲田大学の図書館には多大な便宜をはかっていただいた。

最後に、本書の出版にあたって多大なご支援を賜った名古屋大学出版会の三木信吾氏にも厚く御礼申し上げます。原稿の段階でも編集者としての氏の鋭いコメントから、私が気づかなかった重要な問題を明晰に認識できたことが何点もあったが、さらに校正にさいしては井原陸朗氏と連携され、丹念な点検に加えて重複している箇所、説明が不十分な点などを詳細に指摘して下さいました。私がこれまでに経験した最も厳しい査読であったが、おかげで本書の完成度は大幅に引き上げられたと思う。本書の刊行にあたっては、令和三年度日本学術振興会科学研究費補助金（研究成果公開促進費「学術図書」：課題番号11H51129）の交付を受けている。関係各位に感謝申し上げます。

二〇二二年一月三十一日

阿部 武司

## 《著者紹介》

あべ たけし  
阿部 武司

1952年生

1982年 東京大学大学院経済学研究科第二種博士課程単位取得退学  
東京大学社会科学研究所助手，筑波大学社会科学系講師，  
大阪大学大学院経済学研究科教授等を経て，

現在 国土館大学政経学部教授，大阪大学名誉教授，経済学博士

著書 『日本における産地綿織物業の展開』（東京大学出版会，1989年）

『近代大阪経済史』（大阪大学出版会，2006年）

『大原孫三郎』（編著，PHP研究所，2017年）他

## 日本綿業史

2022年2月28日 初版第1刷発行

定価はカバーに  
表示しています

著者 阿部 武司

発行者 西澤 泰彦

発行所 一般財団法人 名古屋大学出版会  
〒464-0814 名古屋市千種区不老町1名古屋大学構内  
電話(052)781-5027/FAX(052)781-0697

© Takeshi ABE, 2022

Printed in Japan

印刷・製本 亜細亜印刷(株)

ISBN978-4-8158-1059-7

乱丁・落丁はお取替えいたします。

 〈出版者著作権管理機構 委託出版物〉

本書の全部または一部を無断で複製（コピーを含む）することは，著作権法上での例外を除き，禁じられています。本書からの複製を希望される場合は，そのつど事前に出版者著作権管理機構（Tel：03-5244-5088，FAX：03-5244-5089，e-mail：info@jcopy.or.jp）の許諾を受けてください。